

[新刊紹介] Chromosome atlas of flowering plants in Japan, **花を訪れる蛾たち: 知られざる姿を求めて**, 三木茂博士寄贈水草?葉標本目録, 日本樹木誌, 高等植物分類表, 地衣類のふしぎ, 九州の花・実図譜?. , 原色九州の花・実図譜

著者	鳴橋 直弘, 中田 政司
著者別表示	Naruhashi Naohiro, Nakata Masashi
雑誌名	植物地理・分類研究
巻	57
号	2
ページ	105-107
発行年	2009-12-30
URL	http://doi.org/10.24517/00053422



新刊紹介

○ Tsunehiko Nishikawa (編) : **Chromosome atlas of flowering plants in Japan** National Museum of Nature and Science Monographs No. 37. B5判, 706頁. 2008年7月25日. 国立科学博物館. 非売品.

本書は、日本産種子植物のこれまでに発表された染色体数の一覧である。

本は、前半が植物とその染色体数で、後半がそれらの出ている文献である。植物名は学名のみで、科別に記載され、科の順序はアルファベット順で、Acanthaceae (1頁) から Zosteraceae (461頁) で、文献は人名のアルファベット順で 462-706 頁である。科の下にアルファベット順の属があり、属の下にアルファベット順の種名がある。非常に分かり易いが、巻末に属の検索表がないので、その属が何科に属するのかが不明の時は、他の本で調べてからでないと使えない。また、和名を知っていても、学名が分からないと、この本を利用することができない。

これまででは、植物の染色体数を知るために、Fedorov (1969) の “Chromosome numbers of flowering plants” を調べてから、IOPB の “Chromosome data 1989-2001”, IAPI の “Index to plant chromosome numbers 1956-1974” とミズリー植物園の “Index to plant chromosome numbers 1975-2003” を引かないといけなかった。これらの多くの Index を全て調べるのは大変なことであった。これが 1冊に纏められたのであるから、きわめて便利な本が出来たものと喜んでいる。日本産植物の染色体数を知りたい読者は先ずこの本を調べて、出典の文献に当たれば良いことになった。この本の完成まで約 15 年を費やしたという編者の西川恒彦氏に感謝したい。‘Memoirs of the National Science Museum’ のシリーズは購入可能であるが、残念ながら、この ‘National Museum of Nature and Science Monographs’ のシリーズは非売品で一般の人は購入することが出来ない。本は大学、博物館、植物園、研究所等に寄贈されているので、そこで見せていただくと良い。

(鳴橋直弘)

○ 池ノ上利幸 : **花を訪れる蛾たち 知られざる姿を求めて** A4判, 215頁. 2008年11月30日. 昆虫文献六本脚. 6,000円.

本書は、花を訪れた蛾の写真集である。

1頁に、はじめに、本書の構成、謝辞がある。2~80頁は、訪花中の蛾の写真で、1頁に8枚、合計632枚、種としては614種搭載されているという。81~204頁は、写真毎の蛾の学名、和名(科)、1~3行のノート、開帳、分布、訪花植物が記載されている。205~207頁はあとがきで、208~214頁は索引となっている。“訪花植物” のところには、植物の学名と和名がある。

植物屋は訪花昆虫として蝶のことは良く知っている。しかし、生物学的に蝶と蛾は昆虫の鱗翅目に属し、同じ仲間、しかも両者は明確に区別することは出来ないと言われる。日本に分布する蝶は300種にも満たないが、蛾は6,000種類近く記録されているという。鱗翅目のほとんどの科は訪花性をもつが、その中で特に送粉者として重要なグループは、スズメガヤガ科、シャクガ科、アゲハチョウ科、ドクチョウ科、メイガ科などであるという。日本ではツレサギソウ類、クサギ属、ツツジ属、ユリ属、キスゲ属の訪花昆虫となっていると言われる。アカネ、オオマツヨイグサ、カラスウリ、キョウチクトウ、クサギ、スイカズラ、ハマユウ、ヒガンバナなどの蛾媒花の花は、夜またはたそがれ咲き、横向きに咲き、白色や淡黄色が多く、強い芳香性があり、蜜はおくまったところにあり、その量は多いと言われる。

鱗翅目の古い化石は白亜紀中期からであり、白亜紀以降の被子植物の適応放散と密接に関係がある。被子植物を食べる昆虫として、鱗翅目の幼虫の占める割合は非常に大きい。植物屋は送粉者として、また、食植性昆虫としての蛾をもっと知る必要があるだろう。

自分の扱っている植物にどんな蛾が来るのか、知りたいものである。同じ著者の次の本は、限られた場所での蛾と訪花植物の観察記録であるが、参考になる。池ノ上利幸著「山口県東部における蛾類の訪花活動」誘蛾灯 Supplement 7. pp. 1-123. 1999年5月1日 誘蛾会発行。

昼間活動する蛾もいるが、蛾は圧倒的に夜行性である。著者は携帯用の6ワットの蛍光灯を利用しているという。多分、写真はフラッシュを使用したものだろう。これだけの種類の写真を集めるために何年掛かったのだろうか。著者の執念が窺える本である。

(鳴橋直弘)

○ 志賀 隆・藤井伸二・瀬戸 剛 : **三木 茂博士寄贈水草腊葉標本目録** B5判, 42頁, 付録CD. 2009年3月31日. 大阪市立自然史博物館. 1,000円.

本書は、大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第41集として刊行され、大阪市立自然史博物館所蔵の三木

茂博士の水草コレクションのリストである。

本は、プレート 2 枚、はじめに、三木 茂先生の水草標本について、目次、凡例、コケ植物、種子植物、参考文献からなる。この目録には、湿地や湿原に生育する植物や蘚苔類まで含めた広義の水草を 50 科 217 種、3,630 点を掲載しているという。

これらの標本は、北海道から九州まで広く日本中から採集されているが、中国、台湾、朝鮮、樺太、欧州の外国産も含むとともに、水草研究の重要な本である三木 茂著『山城水草誌』（1937 年）の裏付けとなる標本である。三木先生は多数の水草の新種を公表されているが、基準標本の指定はされていない。これらの標本には基準標本となるものが多数含まれている。一部、選定基準標本 Lectotype の指定がおこなわれ、この本でそれが示されている。

購入希望者は、大阪自然史センター（〒546-0034 大阪市東住吉区長居公園 1-12 TEL 06-6697-6221 E-mail tomonokai@mus-nh.city.osaka.jp）に問い合わせるとよい。（鳴橋直弘）

○ 日本樹木誌編集委員会（編）：日本樹木誌 1 B5 判，760 頁，2009 年 7 月 8 日。日本林業調査会，5,238 円。

本書は、研究を通して特定の樹種について精通した分担者によって執筆され、今回刊行された 1 ではブナ、コナラ、スダジイなど 32 種が対象として掲載されている。本書の内容は、樹種ごとに分類、分布、群落内での位置付け、繁殖及び更新、生理的特性、成長、管理、遺伝、病虫害、利用などについて、これまでに発表された論文や報告書が網羅されており、それぞれの項目の概要が説明されたものである。また、巻末には 2 万 5 千分の 1 メッシュ図をもとに 32 種の分布図が記されている。また、単に各樹種の総説にとどまらず、執筆者によってトピック的に樹種特性などの研究成果が紹介されている。

日本の主要な樹木について調べるとき、本書があればかなりの情報量が得られるので、続巻の刊行が期待される。（中田政司）

○ 邑田 仁（監修）米倉浩司（著）：高等植物分類表 B6 変形判，189 頁，4 図版。2009 年 10 月 20 日。北隆館，2,381 円。

本書は、遺伝子 DNA に基づいた分類体系による維管束植物の分類表である。

本は、はじめに、この分類表の使い方、目次、新しい植物分類体系、系統関係に基づく分類体系での主な変更点、高等植物分類表（APG 対応）、新旧分類体系対照表 I（新高等植物分類表との対照）、新旧分類体系対照表 II（Cronquist-Engler-APG 対応）、引用文献、和名索引、学名索引からなる。

日本産の全ての目と科を配列し、その全ての属を含めているほか、日本に産しなくても系統上重要な目や科は掲載しているという。従来の分類体系との違いを分かり易く示すために、Engler の分類体系や Cronquist の分類体系との比較表がある。

D. W. Bierhorst (1971) が、“Morphology of vascular plants” で、マツバランがライニアからの直接の植物ではなく相当進んだものであることを個体発生的な研究から示したが、この分類表ではマツバランはハナヤスリ目と近縁で大葉類に分類され、Bierhorst の考えと似ている。

科より上位分類群の系統関係の不勉強な筆者には、びっくりさせられる変化である。科より下位の分類群、例えば属に関しては、大きく取るか小さく取るかやグレードを認めるか認めないかで変わってくる。本書では、サクラ属はモモ属、アンズ属、サクラ属、バクチノキ属、ニワウメ属、ウワミズザクラ属、スモモ属に細分されている。しかし、D. Potter et al. による ‘Phylogeny and classification of Rosaceae’ Pl. Syst. Evol. **266** : 5-43 (2007) では、*Prunus* (サクラ属) の一つになっている。また、オランダイチゴ属はキジムシロ属に統一されるという意見 D. J. Mabberley, ‘*Potentilla* and *Fragaria* (Rosaceae) reunited’ *Telopea* **9** : 793-801 (2002) もあり、分類群の範囲については多くの意見がある。

この新分類体系をもう少し勉強したいと希望する読者には、M. G. Simpson (2006) の “Plant systematics” が写真や絵がふんだんにあって良い教科書であると思われる。（鳴橋直弘）

○ 柏谷博之：地衣類のふしぎ 新書判，206 頁。2009 年 10 月 24 日。ソフトバンク・クリエイティブ。952 円。

写真がすばらしい。240 点の写真はほとんどが著者によって撮影されたもので、種類の特徴だけでなく、生態から顕微鏡を使った微細な形態、さらには利用や研究法に至るまでページをめくるごとに地衣類の世界が見えてくる。前半は地衣類についての生物学的紹介で「地衣類とは何か」、「身近に見られる地衣類」、「地衣類の

生物学」, 「地衣類の成長」, 「地衣類の化学分類と地衣成分の検定法」の5章からなる。後半は地衣類に関する様々な話題が紹介された「地衣類とヒトのかかわり」と、著者の長年にわたる研究活動に基づく「地衣類調査と標本のつくり方、写真撮影」の2章で、標本の重要性や研究生活に触れられた話題は地衣類に限らず自然史研究を志す人の参考になる。最後にこの素晴らしい写真がどうすれば撮影できるか、というヒントも紹介されている。

(中田政司)

○ 益村 聖：原色 九州の花・実図譜 IV. B5判変型, 127頁, 2009年12月10日. 海鳥社. 4,200円.

本書は、九州に産する植物の画集であり、2003年11月出版の第I巻、2005年8月出版の第II巻、2007年10月出版の第III巻に続くIV巻目である。

植物画は花期か果実期のもので、和名、科名、学名、簡潔な生育地と草か木か、および花期が記されている。花と果実の両方あるものや、花色の違う2枚の絵がある場合もある。また、まれに花や果実の拡大図がある。この巻には、ケラマツツジ、ヤマツツジ、ミヤマキリシマ、サツキ、マルバサツキ等224種、1亜種、8変種、1雑種、計234分類群の植物が出ている。

本のあとがきに次の文章がある。“植物についても全く同じようなことが言え、長いこと観察を続けていると、何となく区別できるようになる。面白いもので、的確な検索表の区別点は忘れてしまっても、その雰囲気で見分けるようになるのである。それを言葉で説明しなさい、と言われても困る。枝振りや葉の広がり方等々の微妙な違いを、文章で表現しようとする随分冗長なことになってしまいそうである。これは検索表には絶対に書けない。しかし、長年植物と付き合ってみてやっと分かってくる、この植物の「種」の持つ特有の雰囲気だけは、これからもできるだけ大切にしながら観察していきたいと思っている。この雰囲気の違いまでも植物図に表現できたらというのが、辿り着けそうもない私の夢でもある。” 分類学者はその種特有の形質を文章で表現しようと努めている。植物画家はその種の特徴を絵で表現しようとする。これはどちらも大変な目標である。

植物1種を描くのに、その材料集めから、下絵描き、彩色と大変な集中力のいる作業である。夏場、花などはすぐに萎れるものもあるだろう。このシリーズは次の予定の第V巻で纏められる予定とか。完結されることを心より願っている。

益村氏の絵は色鮮やかで、心が洗われるようである。見ていて楽しい本である。

(鳴橋直弘)